広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第３号　2022　120－128

チョーサーの語りのテクストにおける時制の交替移行について

― 現象と認知主体の近さに着目して ―

西原　貴之・中尾　佳行[1]

（2022年10月７日受理）

Tense Shift in Chaucer's Narrative Text:
With Special Regard to the Synchronization of Subjectivity and Phenomena

Takayuki Nishihara and Yoshiyuki Nakao [1]

Abstract: In Chaucer's narrative text events usually expressed in the past tense in modern English are more often than not expressed in the present tense. The speaker or subjectivity of cognition is flexible enough to depart from the speech time (absolute present time) to be close to the phenomena in the past, which tends to promote the present tense. Tense shift analysis in Chaucer has so far been limited to the historical present and tense agreement in indirect speech with little systematic investigation. Chaucer's tense shift is similar to the tense shift from the past to the present in Japanese which is derivable from I-mode. The aim of this paper is to reconsider Chaucer's tense shift based on this Japanese I-mode. We set up two research aims 1) to describe tense shift systematically; 2) to make clear factors to promote tense shift. We concluded that tense shift in Chaucer's narrative text occurs through wide ranging units: one metrical line, one simple sentence, one compound sentence, one complex sentence (main clause + nominal clause, adjectival clause, or adverbial clause), and a stretch of discourse comprising dozens of sentences, and that this repeated shift is due to the synchronization between the subjectivity of cognition or the conceptualizer and the phenomena with added subfactors of orality and generic/gnomic implications. The interpretation of this remains to be further considered.

Key words: Chaucer, subjectivity, tense shift, synchronization, Japanese I-mode
キーワード：チョーサー，認知主体，時制の交替移行，時空間の接近性，日本語の I-mode

１．はじめに

チョーサーの語りは登場人物の過去の経験の再生であり，直接話法を除けば基本的に過去形で表されることが期待される。しかし，実際は，現代英語では過去形が使用される多様な構造において現在形が用いられている。本論の目的は，チョーサーの語りのテクストにおいて，時制の交替移行，即ち，語り部において現代英語では過去形が使われてもよいと思われる箇所に現在形が使用されている現象，がどのようにまたなぜ生ずるのかを記述・説明することである。

チョーサーの時制の分化は現代英語と大差はないが，反面，時制の交替移行については，現代英語と大きく異なっている。これまで前者については体系立った記述研究があるが，後者は，従来の研究では多様な構造の一部に限られており，それを全体的に捉え，そ

[1]広島大学名誉教授

の多様性の背後にはどのような要因が作用しているのかは，十分に考察されていない。

この点，日英語比較研究は過去形から現在形への交替移行について多くの発見の蓄積があり，チョーサーの当該の交替移行を読み解く有益なヒントを与えてくれるように思える。チョーサーの時制交替に応用でき，これまでの研究を一層体系的に前進させるものと期待される。

2．先行研究と研究課題

2.1　先行研究

チョーサーの語りのテクストにおける過去の現象の再生（特に現代英語では過去時制が使用されてもよいと思われる個所に現在時制が使用される，所謂時制交替移行の事例）の扱いは，歴史的現在の用法の解明，文法的次元での直接話法と間接話法の境界の曖昧性の指摘，間接話法での時制の一致の流動性の記述，という程度に留まる。チョーサーないし中英語の研究は凡そ次の通りである。Mustanoja (1960) は歴史的現在の意義付けの多面性に着目し，分類的に考察した。Visser (1972) は，等閑視されていた時制の選択と韻律の関係性を指摘した。Kerkhof (1982) は時制形式の分化とそれぞれの用法を記述し，特に Benson (1961) の歴史的現在の研究を要約し，動詞のアスペクトが継続相であるという特性を主張した。Fischer (1992) は歴史的現在について過去の研究を批判的に紹介した。中尾 (1972) は歴史的現在の用法をまとめ，また伝達部と被伝達部の間で時制の一致がしばしば見られないことを指摘した。Nakayasu (2013) は「騎士物語」の歴史的現在に着目し，意味論・語用論の観点から時空間の接近性（synchronization）の特性にその用法を結論付けた。Weinrich (1970)，Fleischman (1990)，そして Fludernik (1996) はテクスト言語学的またはナラティブの観点から考察し，時制は文法現象には留められないことを指摘した。このようにチョーサーの時制の交替現象については体系立った研究は行われていない。これらの研究は時制交替移行を引き起こしている構造の一部のみの考察となっており，未だ他の構造も含めた全体的・体系的な調査には至っていない。交替移行の生ずる構造を分類整理し，その実態を調査するとともに，このことを通して時制交替移行を促す要因を明らかにする必要がある。現象と認知主体の近さ，認知の柔軟な動きが現在時制への移行の鍵を握っているように思えるが，この点からの考察も未だ不十分で，今尚見直しが必要である。

一方で，日英語比較研究は過去形から現在形への交替移行について多くの研究が積み重ねられてきた。簡潔に紹介しておくと次の通りである。

現代英語では，文学作品などの語りの場では過去の出来事が聞き手に提示されることになるため，主に過去時制が中心的に用いられるのが一般的である。もちろん，所謂歴史的現在の用法に典型的に見られるように，文章の途中で時制を現在時制に交替移行させることは可能であるが，現代日本語に比べると，現代英語では時制の交替移行は生じにくいとされてきた。その理由として，語り手（発話者）が，発話時という固定的位置から過去の出来事の時間的な位置関係を一律的に指定した上で語る傾向が強いためであるとされる（e.g., 安西 , 2000; 河原 , 2009; 樋口・大橋 , 2004）。

現代英語の過去時制には，（しばしば現在完了と比較される形で）「現在との断絶」という点がその中心的な特徴としてあることが指摘されてきた（e.g., Comrie, 1985; Declerck, 1990; Quirk et al., 1985）。現代英語の過去時制では，現代日本語の過去時を表す表現よりも，この特徴がより明瞭であることが指摘されている（e.g., 藤原 , 2021）。一方，語りの中での現在時制（特に単純現在形）については，話し手や語り手の知識の一部が表出されたもの（したがって発話時においても依然として成り立っている），過去時制で語られている内容に対する語り手のコメント・評価（Weinrich, 1970），といった働きをしていることが指摘されており，発話時における未完了性（imperfectiveness）または -endpoint という特性が重要な特徴とされてきた（対して過去時制には +endpoint という結果を含意する性質があるとされる）。

現代日本語では，典型的には過去時制はタ形で，現在時制はル形で表現される。ただし，タ形は時間軸上のある基準時よりも相対的に先行していることを表すという働きをするものであるため，必ずしも過去時を表すわけではない（樋口・大橋 , 2004; 和田 , 2002）。例えば,「陽子が明日出発した後で, 僕は故郷へ向かう」という表現の下線部は「向かう」という動作に対して先行しているだけであり，過去時は表していない（和田 , 2002, p. 18）。一方，ル形は時間軸上のある基準時に対する非先行性（基準となる出来事と同時であるか，時間的により後方であること）を表し，現在時を表現するとは限らない（樋口・大橋 , 2004; 和田 , 2002）。例えば,「彼が来る前に掃除をした」という表現では，下線部は「掃除をした」という動作の後に生じる出来事であり，かつ時間的には過去の出来事を表している（樋口・大橋 , 2004, p. 127）。

現代日本語の語りの中ではタ形とル形が混用され，

現代英語に比べると時制の交替移行がより頻繁であることが指摘されてきた。このような現象が見られる１つの原因として，すでに指摘したように，現代日本語のタ形とル形のどちらも過去時と現在時を表しうるということが挙げられる（ただし，田村 (2005) は現代英語の過去形でもタ形のように先行性を表す用法が皆無ではないことを示している）。もう１点，現代日本語で時制の交替移行が生じやすい理由として，現代日本語では視点が自由に動き，文脈中の様々な時点に視点を置き，その時点から出来事を語ることが可能であることが多くの研究者により指摘されている（安西 , 2000; 池上 , 1986; サイデンステッカー・安西 , 1983; 澤田 , 1994）。このことは，語り手の発話時という点に視点が固定された状態で物事が語られる現代英語とは対照的である。現代日本語では，例えば語り手の発話時から特定の登場人物の出来事時に視点を動かし，その出来事時から直接その時起こった事柄などを語ることができるため（つまり，語り手の発話時を介することなく過去の出来事時をまさにそのことが生じた「現在」から語るため），現代英語よりも時制の交替移行が生じやすい。実際，日本語の小説において２つの時制が混用されている例は多く示されてきた（e.g., 安西 , 2000; 樋口・大橋 , 2004）。参考までに日本語の時制交替移行の例とその現代英語訳を挙げる。日本語と英語で時制に差異が生じている箇所には下線を付している。

> 暫くして泣いたら書生がまた迎いに来てくれるかと考えついた。ニャー，ニャーと試みにやって見たが誰も<u>来ない</u>。その内池の上をさらさらと風が<u>渡って</u>日が<u>暮れかかる</u>。（夏目漱石『吾輩は猫である』）
>
> After a while it struck to me that, if I cried, perhaps the *shosei* might come back to fetch me. I tried some feeble mewing, but no one <u>came</u>. Soon a light wind <u>blew</u> across the pond and it <u>began</u> to grow dark. (Ito & Wilson による英訳)

認知言語学においては，現代日本語と現代英語における時制交替移行の生じやすさは２つの認知モードの違いの一環としてしばしば議論されてきた (e.g., 河原 , 2009; 中村 , 2004; 藤原 , 2021)。それらは，「認知主体が対象の事物と不可分に融合してインタラクトしている」状況密着型の認知モード（中村 , 2004, p. 35）と，「認知主体がインタラクティブな認知の場の外に出て，あたかも外から客観的に眺めるような」脱主体的な認知モード（中村 , 2004, p. 37），であり，それぞれ I-mode と D-mode と呼ばれている。この２つの認知モードはこれまでの日本語論や日英語対照論での議論（e.g., 池上 , 2007; 宗宮 , 2007）を整理したものである。中村 (2004) によると，I-mode が本来の人間の認識の在り方であるが，人間はそのことを忘れて，あたかも認知主体と対象との直接的なインタラクションは存在しないかのように，認識される対象を客観として思い込む（D-mode）性質があると言う（pp. 37–38）。現代日本語は I-mode が優勢の言語であり，現代英語は D-mode が優勢の言語とされる。I-mode が優勢の日本語では，物語中の過去の出来事時に自由に視点を動かし，その時の状況に密着して描写しやすいため，時制の交替移行がより生じやすく，ル形も文章中に多くみられると考えられている。それに対して，D-mode が優勢な現代英語では，語り手の発話時という，語られる出来事の外の時点に視点を固定した上でその出来事が語られるため，過去時制に統一されて，時制の交替移行が生じにくい（結果として現在時制の使用も少なくなる）と言える。

ここで指摘された特徴，つまり，認知主体の可動性（認知主体が現代英語のように発話時現在に固定される必要はなく，出来事時に移動して現象を間近に捉えることができるという特徴），そして，I-mode（認知主体と現象とが近く，インタラクトするという特徴）は，チョーサーの時制移行に応用でき，これまでの研究を一層体系的に前進させるものと期待される。

2.2　研究課題

研究課題は下記の２点である。

１）チョーサーの語りのテクストにおいて，時制の交替移行は構造的にどのように可変的であるか。

２）時制の交替移行を促す要因は何か。

本論での現在形は，単純現在，現在進行形，現在完了，現在形及び過去形（形式的には過去形だが現在の意味で用いられている）モーダル文を考察の対象とする。チョーサーのテクスト及び作品の略記，引用例の句読点は Benson (1987) に拠る。

３．方法論

3.1　理論的基盤：認知主体と現象の近さ —認知主体の可動性—

現代英語と異なり，チョーサーの語りのテクスト（直接話法を除く語り部）における時制交替移行の背景には，語り手が発話時に固定されず，そこから自由に離れて登場人物の立ち位置（出来事時）に接近し，出来事・現象を眼前に捉えて再生・言語化する，認知主体（語り手）の可動性が大きく作用しているように思える。そして，登場人物の出来事時の中で，特定の出来事・

現象が語り手が取る基準時よりも相対的に先行しているか後続しているかによって時制が交替移行する緩やかさがあるように思われる。これは日本語の時制交替移行のメカニズムに近似している。認知言語学の用語を使えば，発話時に視点が固定されることなく，語り手は出来事・現象と直接インタラクションを行う形になっており，I-mode が強く作用していると考えられる。発話時に視点を固定し，過去の現象に距離を置いて全体的に見通す D-mode が優勢となっている現代英語とは一線を画する。

チョーサーの語りのテクストの時制交替移行，この理論的基盤に付随して起こる諸効果は様々である。これらは時制の可動性の背後にあって，その交替移行を促す要因と考えられる。現在形は，アスペクトの観点で言えば，現象の捉えが -endpoint でプロセス志向である。反面，過去形は +endpoint で結果志向である。モダリティは認知主体の発話時現在の心理状態を描き出す。情報構造では，現在形は事態のプロセスを，過去形は事態の結果を前景化（foreground）する。更に，チョーサーの語りが基本口承的に行われていることから，聴衆を現象に近く引き込み，語り手と聴衆とが相互的かつ共同作業的な対話性を推し進める。テクストは聴衆とのすり合わせの中で意義付けられ，時に両者共有の一般的な意味合いを生み出してもいる。これも時制交替を促す無視できない要素である。

この理論的基盤は本研究を遂行する手段であり，同時に本研究が解明しようとする要因探究の目的でもある。

3.2　検証の手順

研究課題１は，現代英語では過去形で表現されると思われる場合に現在形が使用されている現象が，どのような構造で生じるかを分類し，記述する。研究課題２は，研究課題１のデータに基づいて時制の交替移行がなぜ生ずるのか，その要因を考察する。

3.2.1　研究課題１：時制交替移行の分類・記述

時制交替移行は語りのテクストの全体において見ていく必要がある。ここでは文内的交替移行と文外的交替移行に分けて考察する。言うまでもなく前者は文外的交替移行の一部を切り出したものである。しかし，ここではどこまで交替がミクロに浸透しているかを，談話から自律的に独立させて考察する。後者は，時制交替を文を超えた談話の構造において確認し，時制が語りのテクストにおいて代わる代わる進行する場合と，一端交替（過去形から現在形への移行）すると現在形が連続する場合（所謂歴史的現在）を考察する。歴史的現在は，結論的に言えば，文内で観察した認知主体と現象との近さの拡張事例にすぎないと言える。

Ⅰ　文内的考察

I-1.　１詩行内交替移行（文構造には多様性があるため，その構造タイプについても示す）
Type A1：前半行過去形，後半行現在形
Type A2：前半行現在形，後半行過去形

I-2.　単文内交替移行（Subject + V (Verb) 1 and V (Verb) 2）
Type B1：V1過去形 and V2現在形
Type B2：V1現在形 and V2過去形

I-3.　重文内交替移行
Type C1：過去形 and/but/for 現在形
Type C2：現在形 and/but/for 過去形

I-4.　複文内交替移行
Type Dn1：主節過去形，名詞節現在形
(n=nominal clause)
Type Dn2：主節現在形，名詞節過去形
Type Dr1：主節過去形，形容詞（関係）節現在形
(r=relative clause)
Type Dr2：主節現在形，形容詞（関係）節過去形
Type Da1：主節過去形，副詞節現在形
(a=adverbial clause)
Type Da2：主節現在形，副詞節過去形

Ⅱ　文外的考察（文を超えた交替移行）

II-1. Type E1：過去形から現在形または現在形から過去形が交替的に出現

II-2. Type E2：過去形から現在形に交替移行し，現在形が継続的に展開（歴史的現在）

3.2.2　研究課題２

研究課題１のデータを基に，認知主体と現象の近さが時制交替移行の出現を促す主要な要因であることを日本語の時制交替移行を援用して明らかにする。

４．研究課題１：時制交替移行の文内的考察

語りのテクストにおいては登場人物の経験を再生し，過去形で表されてよいと思える箇所が現在形で表される場合がある。過去形から現在形への時制交替移行にはどのような構造上のタイプがあるか，大雑把ではあるが分類的に記述・説明する。時制の交替移行は構造的に見て小さな単位から大きな単位まで様々な構造に及んでいる。以下小さな単位から例証する。

I-1.　１詩行内交替移行

Type A1：前半行過去形，後半行現在形

(1)　She <u>kiste</u> hir sone, and hoom she **gooth** hir weye.MLT II (B1) 385 [Type C1]

（過去形は下線，現在形はボールドで示す。以下の引

用例も同じ。引用例中の [Type C1] などの表示は，その引用例は Type C1としても解釈できることを示す。以下の角括弧表示も同様。）

Type A2：前半行現在形，後半行過去形

(2) He **gooth** hym hoom, and sette him in his halle PhyT VI (C) 207

I-2. 単文内交替移行（Subject + V1 and V2）

Type B1：V1過去形 and V2現在形

(3) He kiste hire sweete and **taketh** his sawtrie, MilT I (A) 3305

Type B2：V1現在形 and V2過去形

(4) She **taketh** hym by the hand and harde hym twiste MerT IV (E) 2005

I-3. 重文内交替移行

Type C1：過去形 and/but/for 現在形

(5) Now wol I speken forth of Emelye. / Shrighte Emelye, and **howleth** Palamon, KnT I (A) 2816-17

（スラッシュ（/）は詩行の切れ目を示す。以下同様。）

Type C2：現在形 and/but/for 過去形

(6) He **rist** hym up, and every dore he shette, Tr 4.232

I-4. 複文内交替移行

Type Dn1：主節過去形，名詞節現在形

(7) Men seyde eek that Arcite **shal** nat dye; / He shal been heeled of his maladye. KnT I (A) 2705-06

Type Dn2：主節現在形，名詞節過去形

(8) And sche dede as hire fader bad, / And goth to him the softe pas / And **axeth** whenne and what he was, / And preith he scholde his thoghtes leve. Gower: *Confessio Amantis* 8.736-39

なおチョーサーの CT 及び Tr では主節が現在形なら時制交替は起こらない。

(9) He **seith** hym told **is** of a frend of his, / How that ye sholden love oon hatte Horaste; Tr 3.796-97

Cf. seith の後の直接話法

(10) The Sowdan **seith**, "I wol doon at youre heeste," MLT II (B1) 382

Type Dr1：主節過去形，形容詞（関係）節現在形

(11) A mayde child cam in hire compaignye, / Which as hir list she **may** governe and gye, ShipT VII (B2) 95-96

Type Dr2：主節現在形，形容詞（関係）節過去形

(12) This folk **desiren** now deliveraunce / Of Antenor, that brought hem to meschaunce, Tr 4.202-03

Type Da1：主節過去形，副詞節現在形

(13) So spradde of hire heighe bountee the fame / That men and wommen, as wel yonge as olde, / **Goon** to Saluce upon hire to biholde ClT IV (E) 418-20

Type Da2：主節現在形，副詞節過去形

(14) And whan the hors was laus, he **gynneth** gon / Toward the fen, ther wilde mares renne, RevT (A) 4064-65

(15) And thus he **sit** til it was passed pryme. ShipT VII (B2) 88

(16) She **hath** at scole and elleswhere hym **soght**, / Til finally she gan so fer espie PrT VII (B2) 590-91

以上のように，チョーサーの語りのテクストにおいて，時制交替移行が文内の多様な構造で生じていることを例証した。

5．研究課題１：文外的考察

II-1. Type E1：過去形から現在形または現在形から過去形が交替的に出現

(17) This parissh clerk, this joly Absolon, / **Hath** in his herte swich a love-longynge / That of no wyf took he noon offrynge; [Type Da2] / For curteisie, he seyde, he wolde noon. / The moone, whan it was nyght, ful brighte shoon, / And Absolon his gyterne **hath** ytake; [Type C1] / For paramours he thoghte for to wake. / And forth he **gooth**, jolif and amorous, [Type C1] / Til he cam to the carpenteres hous [Type Da2] / A litel after cokkes hadde ycrowe, / And dressed hym up by a shot-wyndowe / That was upon the carpenteris wal. / He **syngeth** in his voys gentil and smal, [Type Da1] / "Now, deere lady, if thy wille be, / I praye yow that ye wole rewe on me," MilT I (A) 3348-62

(18) She **taketh** hym by the hand and harde hym twiste [Type A2 + Type Da2?] / So secrely that no wight of it wiste, / And bad hym been al hool, and forth she wente / To Januarie, whan that he for hire sente. / Up **riseth** Damyan the nexte morwe; / Al passed was his siknesse and his sorwe. / He **kembeth** hym, he **preyneth** hym and **pyketh**, / He **dooth** al that his lady **lust** and **lyketh**, / And eek to Januarie he **gooth** as lowe

/ As evere dide a dogge for the bowe [Type Da2] / He **is** so plesant unto every man / (For craft **is** al, whoso that do it **kan**) / That every wight **is** fayn to speke hym good, / And fully in his lady grace he stood. [Type C2] MerT IV (E) 2005-18

(19) Sire Thopas drow abak ful faste; / This geant at hym stones caste / Out of a fel staf-slynge. / But faire **escapeth** child Thopas, / And al it was thurgh Goddes gras, [Type C2] / And thurgh his fair berynge … His spere was of fyn ciprees, / That **bodeth** werre, and nothyng pees, [Type Dr1] / The heed ful sharpe ygrounde; / His steede was al dappull gray, / It **gooth** an ambil in the way / Ful softely and rounde / In londe. Thop VII (B2) 827-87

II-2. Type E2：過去形から現在形に交替移行し，現在形が継続的に展開（歴史的現在）

(20) Tho were the gates shet, and cried was loude: / "Do now youre devoir, yonge knyghtes proude!" The heraudes lefte hir prikyng up and doun; / Now **ryngen** trompes loude and clarioun. / Ther **is** namoore to seyn, but west and est / In **goon** the speres ful sadly in arrest; / In **gooth** the sharpe spore into the syde. / Ther **seen** men who **kan** juste and who **kan** ryde / Ther shyveren shaftes upon sheeldes thikke; / He **feeleth** thurgh the herte-spoon the prikke. / Up **spryngen** speres twenty foot on highte; / Out **goon** the swerdes as the silver brighte; / The helmes they **tohewen** and **toshrede**; / Out **brest** the blood with stierne stremes rede; / With myghty maces the bones they **tobreste**. / He thurgh the thikkeste of the throng gan threste; / Ther **stomblen** steedes stronge, and doun **gooth** al, / He **rolleth** under foot as dooth a bal; / He **foyneth** on his feet with his tronchoun, / And he hym **hurtleth** with his hors adoun; / He thurgh the body **is** hurt and sithen take, / Maugree his heed, and broght unto the stake; / As forward was, right there he moste abyde. / Another lad **is** on that oother syde. / And some tyme **dooth** hem Theseus to reste, / Hem to refresshe and drynken, if hem leste. / Ful ofte a day **han** thise Thebanes two / Togydre ymet, and wroght his felawe wo; / Unhorsed **hath** ech oother of hem tweye. / Ther nas no tygre in the vale of Galgopheye, / Whan that hir whelp **is** stole whan it **is** lite, [Type Da1] / So crueel on the hunte as **is** Arcite / For jelous herte upon this Palamon. / Ne in Belmarye ther **nys** so fel leon, / That hunted **is**, or for his hunger wood, / Ne of his praye **desireth** so the blood, / As Palamon to sleen his foo Arcite. / The jelous strokes on hir helmes byte; / Out renneth blood on bothe hir sydes rede. / Som tyme an ende ther **is** of every dede. / For er the sonne unto the reste wente, / The stronge kyng Emetreus gan hente / This Palamon, as he faught with Arcite, / And made his swerd depe in his flessh to byte, / And by the force of twenty **is** he take / Unyolden, and ydrawen to the stake. / And in the rescus of this Palamoun / The stronge kyng Lygurge **is** born adoun, / And kyng Emetreus, for al his strengthe, / **Is** born out of his sadel a swerdes lengthe, / So hitte him Palamoun er he were take. [Type C2] / But al for noght; he was broght to the stake. / His hardy herte myghte hym helpe naught: / He moste abyde, whan that he was caught, / By force and eek by composicioun. / Who **sorweth** now but woful Palamoun, / That **moot** namoore goon agayn to fighte? KnT I (A) 2597-653

以上のように，チョーサーの語りのテクストにおいて，時制交替移行が文外的なレベルで断続的に生じていること，及び過去形に交替した現在形が談話的に広く展開していくことを例証した。

時制交替移行は，写本の異同においても見られ，時空間の捉え方（認知主体と現象の距離）には主観が関与していることを示してくれている。

```
HG:044v MI 0188   He kembed  his  lokkes brode / and made hym gay #
EL:036v MI 0188      kembeth hise
BL:MilT 3368                                  #                .
BN:MilT 3374          kembeth                  ,                ;
```

図１　写本と刊本の電子版パラレルテクスト

注１：HG = Hengwrt Manuscript, EL = Ellesmere Manuscript, BL = Blake (1980), BN = Benson (1987)

注２：HG を起点にし，写本・刊本間で相違している箇所のみを示している。# は存在しないことを示す。

注３：HG と EL のテクスト対応について，Stubbs (2000) を参照した。

6．研究課題２：時制交替移行を促す要因

時制の観点から見ると，チョーサーの語りのテクストでは認知主体は発話時現在の固定から解放され，可動性があり，認知主体と現象とが近接することができた。この点，発話時に視点を固定して時制を規定する現代英語と大きく異なり，自由に視点を動かして時制を交替的移行させる日本語と類似している。

文内的時制交替移行について，次のことが分かった。Type A1（用例 (1)），B1（用例 (3)），C1（用例 (5)）に見るように，過去形から現在形への移行は，相対的時間差として規定されている。現代英語では，発話時現在から見れば現象は過去に生起したものであり，共に過去形が自然である。他方，相対的時間関係で言えば真逆の方向，つまり現在形から過去形への移行（Type A2（用例 (2)），B2（用例 (4)），C2（用例 (6)））は，登場人物と現象の近さ，更に語り手と聴衆の関係の近さへと拡張し，現在形は無徴（timeless）で演劇のト書きのような働きをしているように思えた。

Type Dn1においては，主節が過去形（伝達動詞の過去形等）であっても，用例 (7) に見るように，時制が一致し過去形で示されるのではなく，（一般的な真理を表す場合以外でも）現在形で直接話法のように表されている例が散見された。これは登場人物の認知主体と現象の近さを日本語の I-mode のように反映している。絶対的な発話時現在からの認識ではなく，登場人物の視点に移行させた認知である。

Type Dr1においては，関係節のコンテンツが，用例 (11) に見るように，母親が子供に示す一般的な態度を表すことがあり，これは現在形で聴衆に近く接し，情報共有していると考えられた。Type Dr2は，相対的時間に沿ったものもあれば，逆に主節が現在形であるにも拘わらず先に起こったように表され，以後起こったことが過去形の場合もある。後者は注意を要し，用例 (12) がそうである。この場合現在形はアスペクト的に未完了で動作のプロセスを，関係節の過去形は完了として動作の結果を表し，現在形と過去形の特徴が対比的に意義付けられていた。

Type Da の従属節は whan …/… whan，… swich/so … that …，… til that …等，多様性がある。whan の従属節と主節は同時間的に生起していると考えられ，殆どの場合時間差が感じ取れなかった。Type Da1であれ Da2であれ，時制の違いは，どちらの要素をより近く前景化し，どちらをより遠くへ背景化（background）するかの操作であるように思えた。… swich/so … that …，… til that …は，主節は原因ないしプロセスを，そして従属節は結果を表すもので，絶対的な発話時現在との関係では共に過去形で済まされるところである。Type Da1（用例 (13)）のように，相対的順序で主節が過去で，従属節が現在の場合もあれば，他方，Type Da2（用例 (14), (15), (16)）のように，時間関係に矛盾し，主節が現在形で，従属節が過去形の場合もあった。後者の場合，時制の問題は時間差の認識を超えて聴衆への情報の近さ，前景化と背景化の問題，に抽象化していると考えられる。

文外的時制交替移行については，次のことが分かった。Type E1（用例 (17), (18), (19)）については，時制交替が談話的に断続的に生起し，これは文内の分析で指摘したように，現在形では，語り手は発話時から離れて登場人物の認知に近づき，現象を目の前で捉え，更にはこの立ち位置に聴衆を取り込み，情報の前景化を図っていた。交互で現れる過去形はこの点では情報の背景化であり，現在形と過去形の意義付けが対比的に描き出された。

Type E2，つまり，（時制が過去形から現在形に替わって，また過去形に，とすぐに交替するのではなく）現在形が連続的に展開する場合は，時間的流れを止めた説明であり，また語り手の論評ともなって，時間差が捨象され，登場人物と現象とが近づき，彼らの行動と性情が臨場的に再現された。これは従来指摘された歴史的現在の効果である。この描写は，用例 (20) に典型的であるが，しばしばジャンル（騎士道ロマンス），レジスター（戦い場面の描写），スタイル（頭韻法，現在形の使用等）を反映し，登場人物に特定的であると同時に一般的でもあり，語り手と聴衆との距離の近さ，共通理解を表すものともなっていた。この歴史的現在は，文内的分析で見てきた認知主体と現象との近さと同質で，いわばそれを拡張事例化したものにすぎない。

写本における同じ現象を表す過去形と現在形の異同も，認知主体と現象との時空間の近さ・遠さの問題に起因し，主観的な操作であることを示唆している（図１）。チョーサーの語りのテクストの時制はこのような弾力性のある認知の動きと表裏の関係にあると言える。

7．おわりに

7.1　研究課題の要約

１）研究課題１

時制交替移行のタイプを構造的に Type A1, A2, B1, B2, C1, C2, Dn1, Dn2, Dr1, Dr2, Da1, Da2, E1, E2に分類し，記述した。現代英語では，語りのテクストにお

いて登場人物が経験する現象は，固定的な発話時との関係で過去時に統一的に設定されると想定されるが，チョーサーでは多様な構造に渡って時制の交替移行（過去形から現在形，現在形から過去形への移行）が見られた。これまで大きく取り上げられた歴史的現在は，この多様性の中の一つの事例にすぎないことが分かった。

2）研究課題２

研究課題１で調査した多様な構造で時制交替が促されているのは，チョーサーの時制が現代英語のように発話時に厳密に固定されるのではなく，現代日本語の時制のように，登場人物（認知主体）が現象を経験する出来事時に自由に移動し，そこから現象を近く捉えて再生できることが要因となっていた。

この認知主体と現象の近さに付随して以下のような諸効果が認められた。第一に，オーラリティの文脈では，語り手と聴衆の関係性が近く，現象の解釈は共同作業的に展開する（用例 (11) 参照）。登場人物の経験を第一次経験とすると，現象の解釈は第二次経験として語り手と聴衆の間でインタラクトし，語られた内容が登場人物に特定のものであるのか，一般的であるか，最終判断は読み手に委ねられた。

第二に，現在形はアスペクトにおいて基本未完了であり，「結果」として現象を閉じる過去形とは異なる。用例 (12) で見たように，現在形は，プロセス志向，過去形は結果志向として，その対比が浮き彫りにされた。語彙アスペクトにおいて第一次経験では +endpoint でも，語り手と聴衆との間の第二次経験においては，一般的なものとして捉えられ，-endpoint に変換される可能性がある。例えば，「騎士物語」での馬上槍試合の描写（用例 (20) の歴史的現在の使用）は，伝統的に定着した言語表現を反復し，ジャンル（ロマンス），レジスター（戦い場面），スタイル（頭韻法，現在形の使用）として一般化される表現と見なされる。

第三に，モダリティの使用（用例 (7) 参照）は，認知主体の発話時に近づき，現象との近さを促していた。

第四に，情報構造において，現在形は -endpoint で現象のプロセス，臨場性（用例 (5) 参照），あるいは事態の一般性を前景化した。反面，過去形は +endpoint で，結果，つまり現象を歴史的に遠くから見通す立ち位置，を前景化した（用例 (12) 参照）。

第五に，第一で見たように，中英語の語りのテクストにおける語り手と聴衆の近さ，相互共同的な特徴（用例 (7), (11), (20) 参照）は，時制の交替移行を助長した。テクストは柔軟に多様な主体に開かれ，主体の分散が顕現する。時制は主体の現象に対する遠・近の判断に係わる認知的問題であり，時制交替は写本・刊本間で異同が見られた。

以上のように，チョーサーの語りのテクストにおける時制の交替移行には，認知主体と現象の近さに加え，それと連動した複合的な要因が絡んで生起していると結論付けられる。

7.2　残された課題

本研究は『トロイラスとクリセイデ』と『カンタベリー物語』を基に調査したが，例示に留まり時制交替の生起の有無を量的に調査し，時制交替がどの程度に行われているのかを明らかにすることができなかった。複文構造の伝達動詞と被伝達部の時制，従属節 whan や til that の場合等，時制交替の有無と頻度の追調査が必要である。また，現在時制について，その意義付けは，特定的なのか一般的（generic/gnomic）なのかは必ずしも明確ではなかった。主観的であり同時に客観的でもあるように捉えられたが，歴史語用論のアプローチを適用し，更に検討することも必要である。またこの度の調査は，チョーサーの散文と韻文，韻律パタン，ジャンルなどにより影響されるのか否か，明確にできなかった。この点の更なる分析も求められる。さらに，今後の大きな課題であるが，英語史的な観点から，他の中世作家においても調査し，時制交替移行はいつ頃始まり，どの時代に盛んに使われ，そしていつ頃弱化し，今日の時制に近づいていくのかを明らかにし，既存の研究をより一層前進させることも必要である。

【参考文献】

Benson, L. D. (1961) Chaucer's historical present: Its meaning and uses. *English Studies, 42*(1–6), 65–77.

Benson, L. D. (Ed.). (1987). *The riverside Chaucer: Third edition based on The Works of Geoffrey Chaucer edited by F. N. Robinson*. Houghton Mifflin Company.

Blake, N. (Ed.). (1980). *The Canterbury Tales edited from the Hengwrt Manuscrip.*. Edward Arnold.

Comrie, B. (1985). *Tense*. Cambridge University Press.

Declerck, R. (1990). *A comprehensive descriptive grammar of English*. Kaitakusha.

Fischer, O. (1992). Syntax. In N. Blake (Ed.), *The Cambridge history of the English language (Vol. 2): 1066–1476* (pp. 207–408). Cambridge University Press. (Historical present, pp. 242–245).

Fleischman, S. (1990) *Tense and narrativity: From medieval performance to modern fiction*. University of Texas Press.

Fludernik, M. (1996) *Towards a 'natural' narratology.* Routledge.

Hanna, R., III. (1989). *The Ellesmere Manuscript of Chaucer's Canterbury Tales: A working facsimile.* D.S. Brewer.

Kerkhof, J. (1982) *Studies in the language of Geoffrey Chaucer.* Leiden University Press.

Macaulay, G. C. (Ed). (1900, 1901) *The English works of John Gower* (2 Vols.). EETS E.S. 81, 82.

Mustanoja, T. F. (1960). *A middle English syntax (Part I): Parts of speech.* Société Néophilologique.

Nakayasu, M. (2013). Chaucer's historical present: A discourse-pragmatic perspective. In L. Sikorska & M. Krygier (Eds.), *Evur happpie & glorious, ffor I hafe at will grete riches* (pp. 41–60). Perter Lang.

Natsume, S. (1972). *I am a cat* (A. Ito & G. Wilson, (Trans.)). Tuttle Publishing. (Original work published 1911)

Quirk, R., Greenbaum, S., Leech, G. N., & Svartvik, J. (1985). *A comprehensive grammar of the English language.* Longman.

Ruggiers, P. G. (Ed.). (1979). *The Canterbury Tales: A facsimile and transcription of the Hengwrt Manuscript, with variants from the Ellesmere Manuscript.* University of Oklahoma Press.

Stubbs, E. (Ed.). (2000). *The Hengwrt Chaucer Digital Facsimile.* Scholarly Digital Editions.

Visser, F. Th. (1972). *An historical syntax of the English language (Vol. 2): Syntactical units with one verb.* E. J. Brill.

Weinrich, H. (1970) Tense and Time. *Archivum Linguisticum, 1*, 31–41.

安西徹雄（2000）.『英語の発想』. 筑摩書房.

池上嘉彦（1986）.「日本語の語りのテクストにおける時制の転換について」.『記号学研究』, 6, 61–74.

池上嘉彦（2007）.『日本語と日本語論』. 筑摩書房.

河原清志（2009）.「英日語双方向の訳出行為におけるシフトの分析：認知言語類型論からの試論」.『翻訳研究への招待』, 3, 29–49.

サイデンステッカー, E. G.・安西徹雄（1983）.『日本文の翻訳』. 大修館書店.

澤田治美（1994）.「日英語関係節のテンスと話し手の視点」.『英語青年』, 140(3), 132–134.

田村幸誠（2005）.「英語補文時制の意味と形式の関係に関する一考察：複合グラウンディングの観点から」. In 成田義光・長谷川存古（編),『英語のテンス・アスペクト・モダリティ』（pp. 67–83）. 英宝社.

中尾俊夫 (1972). 『英語史 II』. 大修館書店 .（「史的現在」, pp. 252–54）

中村芳久（2004）.「主観性の言語学：主観性と文法構造・構文」In 中村芳久（編）,『認知文法論 II』（pp. 3–51）. 大修館書店.

夏目漱石（1995）.『吾輩は猫である（上）』. 集英社.（原著は1911年出版）

樋口万里子・大橋浩（2004）.「節を超えて：志向を紡ぐ情報構造」. In 大堀嘉夫（編),『認知コミュニケーション論』（pp. 101–136）. 大修館書店.

藤原正道（2021）.「英語と日本語の物語文の時間の進行についての認知言語学的一考察」.『実践女子大学短期大学部紀要』, 42, 49–61.

宗宮喜代子（2007）.「英語と日本語の「時制・相」について」.『東京外国語大学論集』, 73, 1-19.

和田尚明（2002）.「時制現象から見た日英語比較：間接話法と物語文を中心に」.『コミュニケーション学科論集』（筑波大学人文学部紀要）, 12, 11–34.